

ドイツ人民戦線運動の文学者
—希望と現実—

林 敬 *

Die Schriftsteller der deutschen Volksfrontbewegung
Hoffnung und Wirklichkeit

Kei Hayashi *

Received October 31, 1996

現在、ドイツの代表的な百科事典、 Brockhaus やマイヤー、および歴史年表（例えば〈Daten der deutschen Geschichte〉）には、「ドイツ人民戦線」という項目は見当たらない。人民戦線運動は、フランスやスペインでは一定の成功を取めたが、ドイツのそれは、結論的に言えば、殆ど実態のないものだったからであろう。ナチス政権によって国外への亡命を余儀なくされた亡命者の間でのみ存在した運動で、それゆえ、「人民不在の人民戦線」⁽¹⁾だった。正式には「人民戦線準備委員会」が発足しただけで、それ以上には進展することなく、国際政治の谷間に埋没したのである。

しかし、亡命文学者たちにとって、人民戦線運動は一時期、唯一の夢であった。それまで、ばらばらだった反ナチス行動あるいは反ナチスの思いが、次第に苦しさを増してきた亡命状況の中で、一つの運動に結集し、ドイツの未来が語られ得たからである。たとえ策謀が秘められていたにしても、人民戦線という民主的基盤の上で、ドイツ社会民主党（以下SPDと略称）とドイツ共産党（以下KPDと略称）も、人々の期待を担って共通の目標へ動いた。まさに、人民戦線運動が起きた1935年から1939年までの4年間は、「反ファシズムの民主的伝統の全盛期」だったと言われる所以である。因みに、この時期には亡命文学史上注目すべき作品も書かれた。⁽²⁾

本稿は、人民戦線運動の発端から終焉までの間、直接関わった亡命文学者たちを中心に、亡命文学者たちのそれに懸ける思いと、現実の非情の中で運動への自分たちの関わりを模索しようとした苦闘について考察する。

ところで、ナチス帝国の権力支配、亡命地の状況と並んで、国際的反ファシズム運動、およびSPDとKPDの統一戦線問題は、人民戦線運動に関わった亡命文学者を取り巻くもう一つの現実であった。本稿は反ファシズム運動の現実を理解する前提として、亡命の一般的状況と亡命者の自己理解、次に社共の統一戦線問題を始めに概観したい。

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

(1) 亡 命

1933年3月のナチスの政権奪取以来、数十万人のドイツ人が迫害を逃れて出国したが、その数はかなりまちまちである。約40万人と推定されたり、別なところでは1933年末までに6万から6万5千人、1935年6月までに8万5百人、1936年半ばまでに約10万人という数字があげられている。ここでは1万5千人から1万8千人が政治的、思想的理由の出国者であった。⁽⁴³⁾

ユダヤ人たちが最終的な安住の地を求めて世界各地に散らばったのに対し、亡命知識人たちの主要亡命先は、ヨーロッパがナチス・ドイツに席卷されるまではドイツの周辺国であった。彼らははじめ亡命がそれほど長くなるとは考えず、例えばチェコやフランス、オランダに避難した。そこからナチスの崩壊に役立つことをして早期に帰還したいと願っていた。彼らが想定した活動をクラウス・マンは次の3点に要約している。⁽⁴⁴⁾

- ① 彼らの亡命国、さらには全世界に向かって、ナチスの危険性を警告すること
- ② 非合法的なドイツ国内の抵抗運動に文学的材料を提供すること
- ③ 「もう一つのドイツ」＝「より良きドイツ」の伝統を国外で代表すること

しかし、ドイツを逃れた人たちは亡命国で決して歓迎されたわけではなかった。パリとプラハは亡命センターの観があったが、フランスの例で見ると、亡命者に対する支援とともに、早くから警戒の声も強かった。政策的な面では、外務省内に経済的、社会的、および治安政策上の懸念があり、実際、財産のない者、疑わしい者（国を捨てるような人間は大体疑わしいと見られた）、直接迫害にあっていないユダヤ人の入国が拒否された。社会の重荷になること、大恐慌から立直っていない労働市場から溢れることなどが危惧されたのである。それだけにとどまらず、ドイツ人に対する独特の嫌悪感、さらにはドイツとの善隣関係を脅かすなどの理由で疎まれ、多くの亡命者が滞在許可を得られなかった。このような状況が変化するのは1935年にブルム・人民戦線政権が発足してからで、この時やっと、非合法滞在者に合法滞在の道が開け、フランス内務省にもドイツの政党関係者を含む《相談委員会》が設置された。しかし、財産のない亡命者は合法的労働で収入を得ることができず、知識人グループの場合、少なからず夫人たちの非合法労働によって生活が支えられた。このような事情のもとで、ドイツ語の読者層をもたない作家たちは、失意の中で抵抗よりもアパシーに陥ったという。⁽⁴⁵⁾

ソ連の亡命も独特の難しさがあった。KPDの場合、党指導者テールマンを含めて1933年末までに6万人から10万人の党員がナチスの強制収容所に送られたが、1933年から1935年にかけて多くの党員や共産党系の作家たちはフランスやチェコを経由して、ソ連へ二次亡命した。しかし、ソ連政府機関に知り合いのない者はビザの入手も難しく、場合によってはゲシュタポの手先という嫌疑を受けることもあった。特に粛清開始後は国外退去を求められたり、内務省の犠牲になる危険もあった。もともとソ連には2万人近くのドイツ人技術協力者がいたが、1939年までに1万2千人が出国させられたことからわかるように、ソ連のドイツ人はソ連にとって必要と認められた限りで滞在が認められた。従って境遇も決して自由ではなく、著名人でも旅行が制限された。⁽⁴⁶⁾

その他スウェーデンのような国でも、外国人の就労が規制され、スイスではドイツとの関係悪化を恐れた政府によって、亡命者は国外退去させられた。スイスに関しては、よく引用されているが、ブレヒトは『亡命者との対話』の中で、「スイスは自由でいられるということでは

名な国です。しかし、そのためには観光旅行者でいなければなりません」と辛辣に批評している。

亡命者は事情が何であれ、基本的に歓迎されざる客であり、就労は認められず、絶えず身分証明書の提示を要求され、しかもパスポートは多くの場合期限切れ、下手をするとドイツへ送還の憂き目にあった。したがって、いつも人目を気にしながら、自然仲間内同士で暮らさなければならなかったが、そうしてみると人間の嫌な部分も現われてきた。他の亡命者の中に自分の運命をみて嫌悪感をもったり、絶望から、しばしば諍いも生じた。フォイヒトヴァンガーは亡命体験を描いた作品の一節で、その悲惨について触れて、結局大切にしてきた思いや原理への忠誠は毎日のパンのために簡単に捨てられたと述懐している。⁽⁷⁾

他方、悲惨のフィルターにかけられて、思想がより現実的に、強靱に鍛えられる側面もあった。悲惨な現実の中で、偉大なもの、本質的なものを見る目が涵養され、内面的に豊かに蘇った。「死して、成れ」⁽⁸⁾というドイツの最良の伝統が現実に体験された。彼らが生きた苛酷な時代が、「我々は体験を物事の根源まで、基本的真実、根本的事実まで引きもどして考えさせるという長所をもつ時代に、生きている」とむしろポジティブに認識されたのである。⁽⁹⁾

(2) 統一戦線問題とコミュニストの方針転換

ナチスに追われた亡命者には、亡命後さしあたり反ナチス共同戦線を形成するような共通性はなかった。ユダヤ人たちは新天地をめざし、党や労組の活動家はワイマール時代の対立を引きずっていた。KPD指導者はファシズムを資本主義の最終段階と位置付け、ブルジョア民主主義に代わるプロレタリア独裁によってのみ、ファシズムを打倒できると考えていた。それゆえ、プロレタリア革命のためにはむしろ議会主義のSPDを主要な敵とまでみなしていたが、少なくとも1934年前半まではまだSPDを、ファシズムの政権獲得に手を貸した「社会ファシスト」として敵視する政策を改めていなかった。一方、「下からの統一戦線」でSPDの労働者基盤を脅かしたKPDに対するSPDの不信も不変であった。しかし、両社会主義政党の反目がファシズムを利したことは明らかであったし、両者が期待したナチズムの自らの内部矛盾による自壊も、労働者の自然発生的反乱も現実にはありえないことも次第にはっきりしてきた。彼らの反目が乗り越えられない限り、たとえその後どのような最終目標を描こうとも、反ファシズム闘争の展望は開けてくるはずがないと認識された。このような情勢のもと、コミュニストの陣営では、反ファシズム運動の新しい局面に適合する戦術転換の必要が、まずコミンテルンにおいて確認された。この戦術の転換はやがて反ファシズム運動の糾合、パリのドイツ人・人民戦線運動の重要な動因となった。同時に、この転換が最終的には何をめざしたものかということが、結局人民戦線運動の現実を規定する鍵となった。

1 KPDの方針転換

最初に簡単にKPDのナチス観とSPD観に触れる。KPDのナチス観とSPD観は不可分に結びついていて、KPDの戦術の基礎になっているからである。

KPDはナチスの運動を、もともと「資本主義の発展の最終段階においてブルジョアジーがファシズムへ全般的に移行する場合の二次的現象」と見ていた。ナチス党は「支配階級として

の存在と、資本主義の経済的、社会的構造を維持するために闘争する、ブルジョアジーのテロ道具」にすぎないのである。1933年のナチスの政権獲得に対しても、KPDはまだ教条主義的ナチス観を払拭できず、「広範な大衆基盤の創出と結びついた、資本主義的反動諸勢力の集中の一時的成功」という希望的な観測をもっていた。したがって、ヒトラーに対する抵抗は、KPDにとってはナチズムという危険な形を取った社会的、経済的体制に反対する全面的闘争の一部として現われていた。彼らの任務は、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁を救済の道として明示することとされた。¹⁰

一方、SPDに対しては「資本主義体制の大黒柱」、「ブルジョアジーに奉仕する労働貴族」と批判していた。さらにナチスの勝利によって、議会での多数派獲得による社会主義への移行を主眼とする社会民主主義理論は崩壊したことが証明されたと主張した。もともと社会民主主義者と共産主義者の分裂は、1924年の社会主義インターの復活以来決定的になっていた。ボルシェヴィキ的革命か議会制社会民主主義かという問題で、共産主義者は社会民主主義を「改良主義」ととらえ、プロレタリア革命にとっての最も危険な敵と見ていた。それゆえ1928年のコミンテルン第6回大会では、「社会民主主義との闘争の先鋭化」、「下からの統一戦線」が戦術の基調とされたのである。¹¹ナチス勝利の後も、KPDの社会民主主義に対する見方、その方針は、共に変わらなかった。1933年4月から5月にかけて、KPDの側に労働者階級の多数を獲得すること、社会民主主義の影響を無効にすることをナチス打倒＝体制変革の戦術にとって妥当なこととした。

KPDの戦術が転換するのは、1934年7月を境にしてであった。西川正雄氏は、1933年末の第13回コミンテルン執行委員会総会から1934年7月10、11日の同幹部会とKPD指導部の合同委員会までの各種機関誌に掲載された報告を検討し、社会民主主義観の変化を辿りながら、コミンテルンおよびそれに促されたKPDの統一戦線への転換を論じている。それによると、SPDがドイツを追われたあと、プラハに拠点を置いた主流派、ゾパーデ(Sopade)に対してさまざまな批判が起きて、いくつかのグループが派生したが、KPDは1934年の前半までは、これらの諸グループもひっくるめてすべてマヌーヴァーとみなし、「社会ファシスト」の烙印を押していた。しかし、1934年7月10、11日の上記合同委員会では、変化がややはっきりした姿をとるようになった。その会議で、コミンテルン側からレーム事件の評価をめぐって、KPDが旧来のSPD観にとらわれて、SPD系の労働者に有効に働きかけられず、「危機」を革命に向ける機会を失したこと、また、ドイツのファシズムを支えているのはSPDではないこと、今こそ革命的な社会民主主義のグループとの統一戦線が今日ドイツで最も重要であることなどが批判的に指摘された。それを受けて、KPDのピークもファシズムに対抗する闘争戦線をSPD系労働者と一緒に創り出すことが必要との見解を表明した。¹²

この変化は、それ以前のコミンテルンの変化が前提にされるが、それはディミトロフの7月1日付け第7回コミンテルン世界大会準備会宛書簡で明瞭に現われた。そこでは、統一戦線について「下からのみ実現できるという方針を捨てる必要がある」と結論された。そして、ディミトロフの問題提起は同大会準備委員会の審議に決定的方向付けを与え、ナチス政権発足後の状況の下で、ようやくコミニズム側の現実的な方針が出てきた。「いくつかの国々で社会民主党がファシストによって粉砕され、社会民主主義者の大部分がファシズムに反対して闘っている新しい状況の下では、社会ファシズムという概念を社会民主党全体に当てはめるのは間違

いであり、有害である。」と認識されたのである。¹³⁾ さらにこのコミンテルンの方針転換の重要な要因としては、フランスでの統一戦線の実現、それと前後するフランス共産党とコミンテルンのやりとりと、フランスとの友好関係を重視し始めたスターリンの現実的外交政策があった。

ところで、西川氏は社共の統一戦線は解釈に相当の幅があるにせよ1934年7月以降「合い言葉」になった、と見ている。しかし、問題はこの解釈の幅であった。西川氏自身、結論的に言えば、この方針転換の理論的位置付けはなおあいまいであり、コミュニスト陣営の自己批判よりも、客観情勢の変化が強調された、としている。

この転換のドイツ側の要因としては、ザール帰属住民投票問題とSPD内の分派、ゾパーデ批判グループの存在がある。特に革命的社会主義者グループは、SPD主流派の態度とKPDの戦術を批判して、独自の統一戦線を主張した。KPD内のピーク、ウルブリヒト・グループは彼らに対する批判にもかかわらず、統一戦線論を肯定的に評価した。コミンテルンのトリアッチは、さらに進んで、プラハの指導部除外の不当性を指摘した。1934年1月末にはKPD中央委員会はSPDとりわけ左派との統一戦線、さらに人民戦線の実現をめざすと明言した。¹⁴⁾ (ゾパーデ側は冷淡)そして、この転換の根底にはファシズム観の変化があり、自らへの自己批判もあった。金融・大資本の階級的な性格だけでなく、プチブル的大衆基盤とファシズムの大衆に対する影響力の大きさが注目された。また、ブルジョア体制の差異、ブルジョア民主主義とファシズムの区別が明確にされた。自らに関しては、大衆の革命化を過大評価し、他との協力関係を過小評価した「セクト主義」が批判された。しかし、ナチス政権奪取前にSPDが果たした役割、ブルジョア階級に協力して、ナチスの台頭に手を貸した、という歴史判断は取り消さなかったことにみられるように、他から批判の対象となった「無謬性」を完全には払拭できなかったし、統一戦線をどのようなものとして実現しようとするのかという点で、パートナーたちの不信を免れなかった。

『ドイツ共産党』の著者ドゥーンケもKPDのウルブリヒトと、SPDから別れた「革命的社会主義者」(RS)グループのアウフホイザーの論争を取り上げて、KPD統一戦線推進派の戦術の独善性を批判的に描写している。アウフホイザーは「あらゆる陣営からなる積極的勢力が協同して、ファシスト独裁に反対する闘争と、プロレタリア革命の担い手になる単一の革命的政党へ合流する」こと、その単一政党の第一歩として、「統一行動」から出発する「統一戦線」、その前提として「共同執行委員会」と一党独裁を阻止する権能をもつ「共同中央機関」の設置を要求した。一方、ウルブリヒトは、プラハのSPD執行委員会(ゾパーデ)がアウフホイザーたちの主張を無視しているから、彼らが中央機関に参加することは期待できない、結局ドイツ国内のKPDの党組織とSPD系の「労働者および各グループ」が共同闘争の協定を結ぶしかない、そして、組織問題については組織の統制が中心問題である、とのズレをみせた。また綱領の点でも譲歩せず、左派社会民主主義者がブルジョア民主主義を拒否してプロレタリアート独裁のための闘争を欲するならば、共産党員になるべきだと主張した。アウフホイザーはこれに対し、SPDとKPDの両党組織の原則同等権利を要求した。彼はコミンテルン自体がもうKPDに批判的であること、KPDの破滅的誤謬がSPDの統一戦線拒否に共同責任があることを主張した。この論争の決着は明確にはつかなかった。決着がつかないまま、KPDは統一行動を呼びかけた。ドゥーンケはKPDのあいまいな態度は党指導部内の意見の相違の

反映であったが、結論的には1934年12月の段階では、「非合法活動においては依然として社会民主主義および自由労働組合活動家の獲得を狙っていた」と見ている。¹⁵⁵

1935年7-8月の第7回コミンテルン世界大会で、方針転換をリードしたデイミトロフ自身、民主主義の形態に関しては「民主主義的中央集権制」を基礎に置くべきだと言っていた。R・P・ダットは、KPD以外をファシスト呼ばわりしたことは統一戦線の採用を遅らせたが、しかし、社会民主主義的イデオロギーと闘うことは、彼らの反ファシズムの真の狙いがブルジョア民主制の防衛であるので、依然として正しく、共産主義的なアプローチと社会民主主義的なアプローチの差異は、闘争が続くにつれて一段と深さを増すだろう、と予測した。¹⁵⁶ それゆえ、コミンテルンの統一戦線および人民戦線呼びかけには、始めから、最終目標を明確にしない戦術的要素が含まれていた。

統一戦線論議と実際行動は、いずれにしても問題を残しながら、コミンテルン第7回大会では統一戦線と人民戦線戦術は正式決議された。反戦・反ファシズム・平和と民主主義擁護の大衆路線が正式に認知された。しかし、ドゥーンケが指摘するところによると、社会民主主義者にとっては、「民主集中制」などの共同行動に関する組織問題が清算されないかぎり、コミンテルンとの共同行動にはなお疑念が残った。それだけでなく、KPDはゾパーデと左派社会民主主義者の引き離しをなお画策したし、拡大された反ファシズム「人民戦線」が「ソヴィエト権力のための闘争」途上の第一段階との認識も隠さなかった。1935年8月1日の「ファシズム、労働者階級の団結、およびコミンテルンの任務に関するコミンテルン第7回大会の決議」の第Ⅶ項「ソヴィエト権力万歳！」は確かにそのことを示している。しかし、方針転換に不明確さが残ったものの、KPDの党内論争、主導権争いで、ピーク、ウルブリヒトが新方針を支持し、彼らはやがてコミンテルン第7回大会後の党会議（「ブリュッセル会議」、ただし開催地モスクワ）を経て、新指導部を打ち立てることになった。

2 SPD

SPDはヒトラーの政権獲得後も、しばらくドイツ国内にとどまって合法活動を続けて組織の存続を意図したが、次第にそれが幻想にすぎないことがわかってきた。党主流はその年の5月にプラハに本拠を置いて反ナチス活動を開始した。このプラハ指導部はゾパーデ(Sopade)と略称されたが、SPDを名乗らなかったのは、「敗北によって自己の陣営に生じた降伏の精神を拒否することと、伝統ある社会民主主義運動は決して完全には敵に屈しないことの象徴」の意味であったという。¹⁵⁷

しかし、SPDの反ファシズム活動に関して、SPD内にもプラハの主流派に対する批判グループが現われた。「新発足派」や「革命的社会民主主義者派」である。後者は上述のようにKPD、SPD両者を批判して統一行動を主張したが、「新発足派」もSPDがワイマール時代末期にブルジョア政府に寛容であったこと、およびナチスの政権獲得後非合法活動を躊躇したことを批判し、SPD主流派の反ファシズムの戦闘性に疑問を呈した。これらの批判を受けてゾパーデも左派に対して妥協し、「プラハ宣言」(1934. 1. 28)を発した。そこでは1918年に国家装置を不変のまま受け継いだことを自己批判し、反革命的資本の権力拠点が破壊されるまでの期間は革命政府樹立をうたい、「全体革命、道義的・精神的・政治的にして社会的な革命！」を唱えた。¹⁵⁸

S P D 主流派はその後、1935年1月には、また「革命的社会主義」から「自由主義・民主主義的原則」へ復帰した。結局、K P D に対しても、統一戦線、人民戦線運動の間一貫して不信を持ち続け、人民戦線構築のために、個人の資格での活動はあったが、党として積極的に役割を分担する姿勢は見られなかった。人民戦線運動が内部的にも実らなかったことに関して、もっぱらK P D の戦術が批判的に論議されたが、それはむしろ、K P D が積極的姿勢の取り組みにより、人民戦線運動に大きな影響力をもった結果であった。従って、K P D 抜き人民戦線は考えられなかったから、K P D との共闘を真剣に模索しなかったS P D の態度も、人民戦線の不成功の一方の要因であった。

(3) 亡命文学者の動向

『文学の社会史』で亡命文学の項を執筆したヤン・ハンスは文学者の亡命を3つの時期に区分している。

- ① 1933～1935 ② 1935～1939 ③ 1939～1945

文学者の亡命の第1期を特徴づけるものは、クラウス・マンの定式にあるように、周辺国での反ファシズムの啓蒙活動であった。同時にそれは、現実に自らナチス打倒の実力闘争に参加するというよりも、国際的な圧力やドイツ国内での労働者の反乱でナチス政権が転覆することを期待するものであった。従って、人種的迫害が理由の出国者と比べると、ある種の楽観が同居していた。彼らは政治信条としては右から左まで多様で、決して均質ではなかった。というより、そもそも政治への関心の希薄な作家たちも少なくなかった。しかし、ファシズム政権の画一化政策の下では存続できなかった自由な文学を担った作家たちは、反ファシズム（政治）と「もう一つのドイツ」（文化）を結びつけることを余儀なくされた。T H. マンに従えば、彼らは「政治を強制された」のである。

そして、彼らの活動を支えたのは、亡命雑誌であった。啓蒙的な作品、強制収容所やユダヤ人迫害をドキュメント風に描いた小説も多数出版されたが、亡命者のコミュニケーションを可能にするメディアは新聞と文学雑誌であり、しばしば亡命者間のイデオロギーや戦術論争の舞台になった。1933年には『労働者イラスト新聞』（プラハ）、『パリ日刊』（パリ）、『新日記』（パリ）、『新世界舞台』（プラハ）、『集合』（アムステルダム）、『新ドイツ雑誌』（プラハ）が創刊された。他に「国際革命的著作者同盟（I V R S）」の機関誌『国際文学』（モスクワ）が数年前からあり、政治的なものとしては『ゾパーデ・ドイツ報告』（プラハ）、『反撃』（プラハ）が1933年と1934年に創刊された。これらの雑誌は、政治的立場の目立たないものも含めて、「反精神そのものが文学に戦いを余儀なくさせている」（『集合』）、「筆をとるものは行動する。我々は今、戦闘状態にある。中立はありえない」（『新ドイツ雑誌』）というように、ファシズム＝野蛮に対する闘いに力を結集すること、団結を呼びかけることが雑誌の共通の使命であった。これらの雑誌の意義について、「孤立から抜け出し、抵抗の主張を結集する場、絶えず移動する地理的地点に対して、理念上の集合地点、精神的なセンターの役目を果たした」と評価されている。⁹⁹

ところでヤン・ハンスは第1期の終わりを画する事件として1935年1月のザール国民投票をあげている。この投票で住民の91%という圧倒的多数がナチス・ドイツへの編入に賛成した。このことは反ファシズム各政党のみならず、亡命文学者にとってもイデオロギー闘争の敗北を

意味ただけでなく、ドイツへの政治的な働きかけの中継地を失うことになった。文学者にとってはさらに重要な文学市場も失ったことを意味した。これは亡命文学活動の重大な挫折であり、彼らにとって以後幻想は許されなくなった。もとより亡命は、亡命雑誌の正義のプロパガンダにあるような美しい言葉によって支えられるものではないし、周辺国の官民の反応も必ずしも好意的なものではなかった。もともとヒトラー・ナチスをソ連・共産主義に対する防波堤とする見方は根強かったから、祖国に対する反逆者を胡散臭いものとしてみる向きもあった。そこへもってきて世界大恐慌以後どの国も経済的に好転していなかった。一方、頼みの亡命雑誌も2年程度で廃刊に追い込まれるし、出版物も亡命初期においてはヨーロッパの市民社会秩序は崩壊していたわけではないので、それぞれの事情はあったが、出版社との契約の関係で自由に外国の出版社から出版できなかった。また、ドイツの勢力が拡大するとともにヨーロッパ内の流通地域が縮小していった。亡命作家たちの書いた文章には、ときどきロシア革命による亡命貴族の希望を失った姿の描写があるが、亡命が長期化するにつれ、明日の我が身に見えたからであろう。さらに亡命者たちは絶えずゲシュタポによる直接のテロの脅威にさらされていた。殺害、場合によっては国家反逆罪で裁くために拉致されるということすらあった。ドイツ人民戦線運動はまさにこのような亡命の転換期に始まったのである。

(4) 人民戦線の成立

人民戦線運動は、何よりもコミンテルン、さらにはKPDの人民運動戦術の採用によるが、これに、知識人の反ファシズム活動が合流して広範な流れになった。

人民戦線結成以前の動きとしては、パリを中心にいくつかのグループが結成された。「テールマン解放委員会」(後に対象をオシエツキーなど非コミュニスト系にも拡大)、「反戦・反ファシズム世界委員会」(初めアムステルダムでミュンツェンベルクの呼びかけで作られ、パリで非コミュニスト系と合流した)、「ファシズム犠牲者救援委員会」(国会議事堂放火事件を弾劾する、ミュンツェンベルクの「黒書」2巻の刊行を援助した)、さらに、ハインリヒ・マンが名誉会長になった「ドイツ作家保護連盟」等であった。これらの動きは、1935年6月、パリで開催された「文化擁護国際作家会議」を機に人民戦線結成への流れになった。

フランス人たちによって準備され、文学者側のドイツ人民戦線運動の契機となったこの会議のテーマは、ヒューマニズム、国家と文化、創作の問題、思想の品位、文化擁護など、広範な内容の複合物であった。特徴的なことはコミュニスト系の文学者ヨハネス・ベツヒャーが、ヒューマニズム、ドイツの状況、プロレタリア作家の力について発言して、社会主義の建設や、ソ連の擁護はほとんどしなかったのに対し、マックス・ブロート、ポール・ニザン、ハインリヒ・マンなどの市民派作家がソビエトに対する共感ないしは賛美を表明したことであった。特に、アンドレ・ジイドはロシアにおいてコミュニズムと人間の自立性が矛盾していない、決して画一的ではないと、ソ連に対する信仰告白をした。²⁹それは見方を変えれば会場の文学者たちの間にあった、コミュニズムに対する期待と警戒の入り交じったアンビヴァレントな感情を反映するものであった。確かにジイドのソ連支持発言は、慎重にコミュニズムの本質的主張を回避する努力をしたコミュニストたちにとっては最大の勝利であったが、これによってコミュニズムに対する不信が完全に取り除かれたわけではなかった。一つの例として会議ではソ連に

おける自由の不足、セルゲ追放事件、チェーカー（GPUの前身）の存在が批判されたことがあげられる。この報告に対しては、ジイドもびっくりして関心を示した。コミュニスト系のアンナ・ゼーガースは、今は反ファシズムが問題であり、この件の誇張は反革命的であると主張し、ジイドもソビエトの成果は他の何よりも重要との見解を示し、その場は納まった。しかし、ここには二つの相反するモラルが存在し、結局はそれがドイツの亡命者を二つの陣営に分けていくことになった。このような挿話を含みながら、オルダス・ハクスリー（イギリス）、アンドレ・マルロー（フランス）、アレクセイ・トルストイ（ソ連）などヨーロッパを代表する文学者が多数参加したこの会議は、参加者に感銘を与え、反戦、反ファシズム、反野蛮の文化闘争と「国際文化擁護作家同盟」の設立を決議して成功裡に閉幕した。なお、ベッヒャーは大会終了後、モスクワへの報告の中で、大会がヒューマニズムと文化遺産に重点を置いたこと、つまり、共産党色を隠したことにより成功したが、共産党に忠実な指導グループを国際文化擁護作家同盟内に作ることを勧告した。²¹ その後の展開にとって注目される場所である。

パリの作家会議後、亡命者間で種々のディスカッション・フォーラムが展開された。特に「ザール闘争」に参加したアウグスト・シュテルン等、ジャーナリストたちの活動が活発であった。折しも7月14日のフランス革命記念日に、フランスの人民戦線が成立し、しかも、その主役は共産党というより、左翼知識人であった。このようなフランスの情勢下、パリのドイツ人の間でも同じ7月にシュテルンとケーネン（KPD）のイニシアティブで「ドイツ自由行動委員会」が結成された。²² この委員会のメンバーは、マクス・ブラウン、レオン・フォイヒトヴァンガー、コンラート・ハイデン、ルドルフ・レオンハルト、ハインリヒ・マン、レオポルド・シュヴァルツシルト等のコミュニスト、社会民主主義者、市民知識人であった。彼らは後の人民戦線準備委員会のメンバーである。他方、KPDもプラハでゾパーデに人民戦線結成を働きかけたが、ゾパーデは拒絶した。その結果、コミンテルンのディミトロフから、パリ在住のヴァイリー・ミュンツェンベルクに、反ヒトラー市民知識人、個人資格のSPD黨員に人民戦線結成のテーブルに参加するように呼びかけるべく指令が出された。従って、パリの作家会議以後二つのグループが平行してパリで人民戦線結成を模索した。この二つのグループは1935年9月26日、ミュンツェンベルクの呼びかけで合同会議を開いた。開催場所はパリのルティーツィア・ホテルで、この委員会はホテルの名に因んで「ルティーツィア・サークル」と呼ばれた。議長にはハインリヒ・マンが推された。この会議での議論のベースは「自由」で、コミュニストの側から民主的自由の奪還が主張され、市民知識人と共に参加していたキリスト教会側から社会主義国家における良心の自由の承認が強調された。つまりKPDが良心の自由を保障することが、KPDと共に市民勢力が結集するための前提であった。ここでの議論はナチス打倒の戦術問題よりは、それぞれの立場の反ファシズム勢力をどのようにして結集するか、つまり綱領問題が中心的課題になった。逆にいうと共産党に対する懐疑が根強く存在していた。ミュンツェンベルクやケーネン等パリのコミュニストたちは市民勢力結集を前提に行動したが、しかし、モスクワの党指導部は彼らの戦術に必ずしも同意しなかった。ドイツの未来構想に深入りすることによって、協議が物別れになることを恐れた。それよりも、人民戦線の基礎を党間関係に置こうとした。KPDとSPDの公式の代表者を抜きにしては人民戦線機関は存続できないと判断し、プラハのゾパーデとの協議に重点を置いたのである。しかし、ゾパーデは11月の会談でKPDの呼びかけを拒否し、プロレタリア統一戦線はならなかった。SPD側（シュタ

ンバー、フォーゲル)は、KPD側(ウルブリヒト、ダーレム)に党間協定を誠実に遵守する用意があるかどうか確認を求めた。つまり、コミンテルン第7回世界大会の結論ではプロレタリア独裁が確定されているから、民主主義に基づく市民的自由の尊重は戦略にすぎない、市民的自由が達成されると新たな戦略転換が持ち込まれるのではないかと質問した。KPD側の回答はこの疑惑を払拭できず、SPDは民主的基礎の保障のない統一／人民戦線提案に同意できなかったのである。²³

一方、パリのSPD活動家、ブライトシャイトたちは、人民戦線を拒否したゾパーデの態度に幻滅し、独力でKPDとの関係を緊密にしようとした。KPDの側でも、ミュンツェンベルクは、ゾパーデのKPD抜きのプロック形成に努める「連立政権構想」を批判しながらも、交渉不調の原因はプラハで交渉したウルブリヒトたちにあると推測した。ウルブリヒトはウルブリヒトでパリの準備委員会メンバーが、文学グループに偏りすぎとの警戒感をもっていた。このように、KPDとSPDの交渉不調だけでなく、パリと党指導部の間にも違和感が出てきたとき、12月20日に、非合法組織「赤色救援」の指導者、ルドルフ・クラウス(バイエルン人民党)の処刑事件があった。この事件に対しては、ゾパーデもすぐさま反応してKPDとともに抗議宣言に署名した。この共同抗議行動をきっかけに、KPDとSPDの共同行動が決意され、1936年2月2日、さまざまな矛盾を含みながら、やっと人民戦線結成準備会が実現した。

しかし、この準備会の前日、マルクス主義／労働者政党四者、KPD、SPD、SAP(社会主義労働者党)、RS(革命的社会主義者派)の秘密会合と自由主義的市民の側の秘密会合が別個にあった。政党側は主として戦術面を協議し、市民側は人民戦線綱領の内容を議論した。このことは、いよいよ人民戦線が現実的に結成に向おうというとき、二つの方向に分極化したことを示している。政党と知識人の人民戦線に対するスタンスの違い、現実的な取り組み(戦術)と理念的な取り組み(綱領)という違いであった。一方は現実から規範を導き出す傾向があり、他方は歴史哲学的に考える傾向があった。人民戦線運動に対する期待の違いでもあった。

(5) 人民戦線への期待

ゲオルク・マンフレッドの1937年の認識によると、ワイマール共和国時代の混乱期と亡命体験を経て、知識人の定義においては、「洞察、発言、行動」が一つのセットになった。彼はそのようなとき人民戦線という新しい概念に出会ったという。彼にとっては、統一戦線の党派性と比較して、人民戦線のイデーは党派のイデーの枠をはるかに越えて、根源的なものであった。ドイツのファシズムに対する闘いは前例のない闘いであり、それだけに方針や戦略、綱領を巡っての不一致もあるけれども、人民戦線は「最初にして最後の塹壕」に思われた。²⁴ ここには、現実の党派性を越える理想が求められている。党派自体、もともと一つの理想の追求を使命とするものであるが、現実の闘いにおいて、排他的セクト主義を免れなかった。口先でないセクト主義の克服が人民戦線のイデーに託されている。「超党派性」こそが知識人側から見た人民戦線の一つのイデーであった。

クラウス・マンも、ファシズムの勢力拡大は、反ファシズムの側の不一致に原因があったと見た。この不一致の克服は政党にとっては問題であるが、知識人にとっては統一戦線は自明で、野蛮に対する闘いにおいては「保守的」と「社会的」は矛盾ではない。(彼は「統一戦線」と

いう用語を使っているが、「人民戦線」に接続する意味で使用していることは容易に理解できる。) なぜなら、ヨーロッパの文化を情熱的に維持しようとするものはヨーロッパの経済秩序を変えなければならない、というのが彼の認識であった。ここには文化の側から政治の不一致を仲介する役割の自覚が見られるが、実際それを中心的に行なったのが、ハインリヒ・マンであった。

ハインリヒ・マンは、亡命前から著名な進歩派の代表であった。政治的にはドイツ民主党を支持していたが、ナチスが権力に近付いた1933年には、その阻止のために、SPDとKPDの選挙協力を呼びかけていた。亡命後は、特に人民戦線運動においてSPDとKPDの相克を調停した。それは、文学的人民戦線の研究者ヴィリー・ヤスパーによれば、日常政治的思考の結果ではなく、彼のヒューマニズム構想の発展の論理的帰結であった。彼はヒューマニズムを人民戦線の党派性を乗り越えるイデオロギとして据えた。彼にとって人民戦線は「ヒューマニズム戦線」を意味した。しかもこのヒューマニズムは、キリスト教ヒューマニズムとマルクス主義ヒューマニズムの矛盾点を接合する「新ヒューマニズム」でなければならなかった。「社会主義と自由、2つの拒否できない要求は互いに排除しあうことは許されない」からであった。⁵⁵

亡命文学の研究者、ハンス・アルバート・ヴァルターは、ハインリヒ・マンの新しいヒューマニズム観を、亡命の初期に書き上げられた「アンリ四世」から解釈している。そこで、アンリ四世のヒューマニズムは民衆に思想的根源が置かれていることと、必要とあらば、力の行使を辞さない、攻撃的ヒューマニズムであることを特徴として指摘している。ヴァルターはこのヒューマニズム観を他の作家たちの歴史小説に現われたヒューマニズム、例えばシュテファン・ツヴァイクやケステンの非行動と結びつけたヒューマニズムと比べて、アンリ四世の中でヒューマニズムの概念が完全に変わったとしている。「現実の解放に向う可能性、オルタナティブの可能性を逃してしまう没落に変わって、アンリ四世では抑圧された者、迫害された者が闘う人になった」のである。⁵⁶ 彼は作品をこのように解釈し、ハインリヒ・マンは亡命前の市民的無力感と市民的思考をはるかに克服し、踏み越えたと見ている。

ハインリヒ・マンは政治思想的には、この時期かなり革命的社会主義に傾斜した。国家は経済的強者の装置であるから、人間の自由は、経済・国家のスーパー権力の没収によってのみ確保される、社会主義のみが自由を護るとの認識を示した。この意味でかなり Kommunismus にも近付いた。一方で、SPDを、共和国の初めから、旧官僚層に取り込まれ、資本に奉仕したと批判し（『ドイツ労働者の道』, 1936）、他方、「未来のドイツ共和国はコミュニストによってのみ代表される。真の民主主義者のみがコミュニストの民主的真意を信じることができる（ウルブリヒト宛書簡）」と心情を吐露した。⁵⁷ この点では、コミュニスト系の作家、ヨハネス・ベッヒャーも1932年段階では、ハインリヒ・マンを「自由は決まり文句の宣伝として表面に張りついていただけの日和見主義者」と批判していたが、1934年には「ハインリヒ・マンはヒトラー体制が市民的共和国そのもののはらわたから生えてきたものだ」と確言した。彼は共産主義こそ本物であり・・・と、彼の変化を称揚した。⁵⁸

しかし、彼にとって、社会主義は人間の品位の復興と同義であった。それゆえ、「革命的デモクラシー」は、経済的基礎の変化と関係するけれども、経済的な面だけでなく、自由と呼ばれる、永遠に人間的なものをもたらさなければならないとし、これを「道義的教育の政治体制」と定義した。人間の道義の樹立、「人間のヒューマニズム化」が、彼の「社会主義ヒューマニズ

ム」の核心(キーワード)であった。このような社会主義とヒューマニズムの結合が、彼の考える「もう一つのドイツ」の政治的概念であり、反ファシズムを闘う人民戦線の理念であった。

(6) ドイツ人民戦線運動の破綻

超党派性、文化の社会的基盤、闘うヒューマニズム。しかし、このように文学者、知識人たちが期待したイデーを内包していた人民戦線も、現実の展開の中で、初めから存在していた政治的内部矛盾が深刻化していった。共産主義側は、反ファシズム闘争はファシズムの認識にかかわっており、最終目標、ソヴィエト権力の樹立と切り離せないと考えていた。知識人はファシズムか共産主義かの瀬戸際にたたされ、共産主義にファシズムと面と向う力を求めたが、人民戦線の枠内にその力がコントロールされることを願った。従って、共産主義側は文学的人民戦線、人民戦線のイデーがイデーとしてラディカル化して、政治的人民戦線を凌駕することを警戒した。そのため、人民戦線を党の支配下に置くためにさまざまな工作がなされた。人民戦線準備会が結成されようとしたとき、市民知識人グループがシュヴァルツシルトを中心に信条、思想、信仰等の自由、人間生活の尊重、党支配の根絶等を「綱領」にまとめることを求めたのに対し、一般的な「宣言」の形にとどめたのもその一つであった。また、ウルブリヒトは人民戦線を党が指導を実行するための超党的機関ととらえて、一種の自律的な対抗政府と見たてたミュンツェンベルクを党のパリ代表から解任した。そして、党の排他性に対する最も深刻な不信をもたらしたのが「モスクワ裁判」であった。

モスクワ裁判は1934年12月のキーロフ暗殺を理由に始まった、「トロツキスト」粛清の裁判であるが、粛清の影はすでにコミンテルン大会の時に現われていた。スターリン時代の犠牲者は、秘密警察のテロリズムの犠牲者と、1932-33年のウクライナ農民の餓死者を含めると2千万人という数字があげられているが⁸⁸、ソ連に亡命していたドイツ人の共産主義者の場合は、その70%が粛清の犠牲者になったという。⁸⁹この粛清を通じて、党機関の官僚化、「スターリン主義」がソ連においてもKPD内においても不可避免的に進んでいった。

1936年8月の第一次裁判で、ジノヴィエフ、カーメネフに対する死刑宣告が発表されたとき、ゲシュタポとの協力関係の言及などの当局側キャンペーンにもかかわらず、社会民主主義者や市民知識人の反応は「モスクワ裁判は破局的に影響した。人民戦線政策は甚大なダメージを受けた。」(ヒルファーディング)、「裁判はソ連の信頼性を深刻に揺るがした。処刑はスターリンの地位を確立する単なる権力闘争。」(シュヴァルツシルト)というものであった。シュヴァルツシルトはこのあと人民戦線を離脱し、KPDに対する批判を強めた。もちろん、なんとか人民戦線への影響を食い止めようとする発言も見られた。ハインリヒ・マンは憂慮を表明するのみで抗議はしなかった。ベッヒャーはこの裁判は歴史の試練と受けとめた。⁹⁰

1936年11月に出版された、ジイドの『ソヴィエト紀行』も、その評価を巡って激しい論争を呼び起こした。結局のところ現実のソ連をどう評価するかが、いつまでたっても問題であった。共産主義側は影響を恐れて、事前に出版を阻止しようとした。そこにはスターリン独裁に対する批判があったからである。ジイドはスターリン独裁がプロレタリア独裁と同じものなのかどうか疑問を呈し、「個人崇拜とその強制」に憂慮の念を表明した。この書に対するコミュ

ニスト側の非難は、控え目ではあったが、トロツキスト呼ばわりを言外に匂わせたものであった。フォイトヴァンガーは、ジイドが些細な欠点を過敏に観察し、全体の高邁な計画性を見ていないと批判し、1937年に自らもソヴィエトに旅行し、紀行文を執筆した。しかし、クルト・ヒラーはジイド批判の仕方を問題にして、憂慮に対して反証ではなく、誹謗で応えられている、また、人民戦線は一つの党派に盲目的に従うことかと問いかけた。クラウス・マンは冷静な議論が欠如している、と批判したが、ジイド事件の結末として、コミュニスト陣営からはソヴィエト連邦に不動の立場をとらない者は反人民戦線とみなされ、反人民戦線はトロツキスト(=ファシスト)とみなされる傾向が顕著になった。⁹³

第二次モスクワ裁判(1937年1月)後は、コミュニストと非コミュニストの対立はますます激しさを増した。コミュニスト内でも、亀裂が生じた。ミュンツェンベルクは、KPDが労働者党の統一を要求しながら、古い殻(一党独裁)を一向に抜け出していないと批判し、新しいドイツを作るために、幅広い人民運動をやめない、と主張した。ウルブリヒトが指導権を握ったKPD指導部は、最終的には「下からの」統一/人民戦線をめざし、ミュンツェンベルクを党の人民戦線政策に対する陰謀の廉で除名した(除名は1939年。ミュンツェンベルクは大戦開始後の1940年、原因不明の死に方をした)。一方、オットー・シュトラッサーたちによってコミュニスト抜きの人人民戦線も画策されるなど、1937年秋には人民戦線準備委員会は救いがたく錯乱し、結合基盤が縮小していった。さらに、コミンテルン第6回大会の主演ブハーリンの処刑を決定した第三次モスクワ裁判(1938年3月)は、人民戦線運動に壊滅的に作用した。

ヴァルター・ヘルトは、ソ連内務省の秘密警察の地下牢に消えたドイツの亡命者たちの名を挙げながら、次のように告発している：

「<ドイツ人民戦線>：ハインリヒおよびトーマス・マン両氏、ブレヒト、フォイトヴァンガー、アーノルト・ツヴァイク氏、『新世界舞台』、『パリ日刊』、『民衆新聞』、『新戦線』、マクス・ブラウン、ピーク、デンゲル、メルカー、そしてヤコブ・ヴァルヒャー、彼らはみんな沈黙することで身を護っている。ブレヒトさん、あなたはカローラ・ネーアーの知り合いでしたね。あなたは彼女が、テロリストでも、スパイでもなく、勇敢な人間で、偉大な芸術家であったことをご存じです。何故あなたは沈黙しているのですか？ スターリンが、かつてドイツの知識人によって発行された雑誌の中で、最も墮落し、最も嘘つきの雑誌であった、あなたの雑誌『言葉』の費用を支払っているからですか？あなたは嘘と奴隷根性と低級道徳で第三帝国の牢獄の門を爆破できると本気で信じているのですか？」

この悲痛な告発はトロツキスト系の新聞に掲載された。そのことからわかるように、党派的な響きもあるが、応答は一切なかった。そして、著者自身、ほどなくスターリンの犠牲になった。⁹⁴

合目的性の原理とモラルの原理の対決の中で、人民戦線は疑惑に包まれて求心力を失っていた。KPD中央委員会は1938年5月に、ハインリヒ・マン宛に書簡を送って、統一労働者の基礎の上に人民戦線を構築すること、労働者、農民、中間層、知識人の同盟からなる民主的な人民共和国を建設することを表明するなど、部分的には信頼回復の努力も試みたが、1938年後半にはフランスやスペインの人民戦線も退潮し、もはやドイツ人民戦線運動が失われた求心力を取り戻すことはなかった。そして1939年のヒトラー・スターリン契約といわれた独ソ不可侵条約で、それは決定的に破綻した。

ドイツの人民戦線運動は、ナチスの政権奪取後、国際的な反ファシズム運動の気運の中で、パリを舞台に始まった。コミンテルンを背景とした коммуニスト系の流れと、精神の自由と文化の擁護を訴える知識人がイニシアティブをとった流れの合流した運動であった。両者は当面反ファシズムという共通の目標で一致したが、一方は最終的にはプロレタリア独裁をめざし、他方は超党派的民主主義、ヒューマニズム実現の夢を人民戦線に託した。この中には、スーパー権力から個人の自由と権利を護る機能を社会主義に求める考えもあった。その意味ではコミニズムとの接点もあったが、しかし、プロレタリア革命権力は新たなスーパー権力なのか、精神の自由とヒューマニズムを保障するものなのか、必ずしも信頼しきれない、アンビヴァレントな思いがあった。人民戦線は理想的にも、実際の運動でもこの矛盾の解決を示すことができなかつた。現実には、スターリン主義の粛清の嵐が、非コミニズム側の不信を決定的なものにして、人民戦線運動の基盤を掘り崩した。ドイツ国内での観点から見ると、人民戦線運動はフランスや、スペインの実例が示した通り、表現の自由等が前提であったから、それが無いドイツ国内では成功のチャンスはなかつた。また、モスクワ裁判の帰趨から、コミニストに対する不信で、人民戦線運動が破局的に停滞したときは、オーストリア併合（1938.3）、チェコ・ズデーテン地方の割譲決定（ミュンヘン会談、1938.9）と、ナチス・ドイツの外交が成功していった時期であった。労働者政党の統一戦線が不調だただけでなく、労働者自身の参加が決定的に不足し、ドイツ国内の非合法活動への外からの働きかけは困難であった。

亡命文学者の側では、亡命の開始と共に創刊された『新世界舞台』や『新日記』などの亡命雑誌も、1939年から1940年にかけて、ほとんど廃刊になった。亡命者の自殺も数多く伝えられるようになり、他の亡命者たちを悲しませた。人民戦線運動は彼らにとって、ナチズム支配と亡命という現実の中から模索された、「人間の人間化」あるいは「人間のヒューマニズム化」というような高邁な理想と結びついた運動であったが、政治が作り出す現実の中で、さまざまな思いを残して、一つの夢と消えていったのである。

註

- (1) 山口知三『ドイツを追われた人々』, p181
- (2) Sozialgeschichte der deutschen Literatur, S.444
- (3) 40万人は同上書の採用推定数。その内2千人強が文学関係者としている。
あとの数字は、Ursula Langkau-Alex: Deutsche Emigrationspresse (In: Exil-literatur 1933-1945/hrsg. von W.Koepke u. M.Winkler), S.170
大多数の出国者は人種的理由の亡命者であるが、ドイツ連邦共和国政府新聞情報庁発行の『ドイツにおける民主主義』はナチス側の資料として1941年の国外移住禁止令が出るまでに36万人のユダヤ人が出国したとしている。
- (4) Klaus Mann: Der Wendepunkt, S.335
- (5) Willi Jasper: Hotel Lutetia, S.73
- (6) David Pike: Deutsche Schriftsteller im Sowjetischen Exil 1933-1945, S.94
- (7) Lion Feuchtwanger: Größe und Erbärmlichkeit des Exils, in: Das Wort, Jg.3, H.6, S.3-6. 1938.
これは、後に小説『亡命』の一節に組み入れられた。
- (8) ゲーテ 西東詩集 うたびとの書 至福のあこがれ
- (9) 長橋美美子: 『言葉の力で』, p148
- (10) ホルスト・ドゥーンケ: 『ドイツ共産党 1933-45年』, p97
- (11) 加藤哲郎『コミンテルンの世界像』, p180
- (12) 西川正雄他『ファシズムとコミンテルン』, p222-245
- (13) 同上書 p248
- (14) 同上書 p267
- (15) ホルスト・ドゥーンケ: 『ドイツ共産党 1933-45年』, p203-204

- (16) ジェーン・デグラス編著『コミンテルン・ドキュメントⅢ』, p329-331
- (17) 西川正雄他『ファシズムとコミンテルン』, p227
- (18) 同上書 p232
- (19) 1935年以後の雑誌は、『言葉』(1936, モスクワ), 『尺度と価値』(1937, チューリヒ)
- (20) David Pike: Deutsche Schriftsteller im Sowjetischen Exil 1933-1945, S.155
- (21) ibid., S.158
- (22) Andreas Dybowski: Endstation, Wartesaal oder Schatzkammer für die Zukunft, S.93
- (23) David Pike: Deutsche Schriftsteller im Sowjetischen Exil 1933-1945, S.218
- (24) Manfred Georg: Der Intellektuelle in der Volksfront, in: E.Loewy, (hrsg) : Literarische und politische Texte aus dem deutschen Exil 1933-1945, S.633
- (25) Wili Jasper: Entwürfe einer neuen Demokratie für Deutschland. Ideenpolitische Aspekte der Exildiskussion 1933-1945, in: Thomas Koebner (hrsg) : Exilforschung Bd.2, S.275-276
- (26) Hans-Albert Walter: Heinrich Mann im französischen Exil, in: H.L.Arnold : Heinrich Mann, S. 121
- (27) Andreas Dybowski: Endstation, Wartesaal oder Schatzkammer für die Zukunft, S.98
- (28) Sozialgeschichte der deutschen Literatur, S.455
- (29) ゲオルゲ・リヒトハイム : 『社会主義小史』, p328
- (30) ホルスト・ドゥーンケ : 『ドイツ共産党 1933-45年』, p272
- (31) David Pike: Deutsche Schriftsteller im Sowjetischen Exil 1933-1945, S.224-225
- (32) ibid., S.230-232
- (33) Heinz Aboch: Von der Volksfront zu den Moskauer Prozessen. In: Exilforschung. Band 1. S.42

主要参考文献

- Arnold, Heinz Ludwig (hrsg) : Deutsche Literatur im Exil 1933-1945. Band 1-2. 1974, Frankfurt am Main.
- Loewy, Ernst (hrsg) : Literarische und politische Texte aus dem deutschen Exil 1933-1945. 1979, Stuttgart.
- Feuchtwanger, Lion : Exil. Roman. 1979, Frankfurt am Main.
- Mann, Heinrich : Verteidigung der Kultur. 1971, Berlin.
- Mann, Klaus : Der Wendepunkt. (渋谷寿一訳『転回点』) 1976, München.
- Aboch, Heinz : Von der Volksfront zu den Moskauer Prozessen. In: Exilforschung. Band 1. 1983, München.
- Berg, Jan u.a : Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. (山本尤他訳『ドイツ文学の社会史』) 1981, Frankfurt am Main.
- Dybowski, Andreas : Endstation, Wartesaal oder Schatzkammer für die Zukunft. 1989, Frankfurt am Main.
- Jasper, Willi : Hotel Lutetia. 1994, Wien.
- Jasper, Willi : Entwürfe einer neuen Demokratie für Deutschland. Ideenpolitische Aspekte der Exildiskussion, 1933-1945. In: Exilforschung. Band 2. 1984, München.
- Pike, David : Deutsche Schriftsteller im sowjetischen Exil, 1933-1945. 1981, Frankfurt am Main.
- Walter, Hans-Albert : Heinrich Mann im französischen Exil. In: Heinrich Mann, hrsg von Hainz Ludwig Arnold. 1971, München.
- ホルスト・ドゥーンケ (救仁郷繁 訳) : 『ドイツ共産党 1933-1945年』 1974. 東京
- ジェーン・デグラス (編著) (対馬忠行, 雪山慶正, 石井桂 訳) : 『コミンテルン・ドキュメント』 1977. 東京
- 富永幸生, 鹿毛達雄, 下村由一, 西川正雄 : 『ファシズムとコミンテルン』 1978. 東京
- 山口知三 : 『ドイツを追われた人々』 1991. 京都
- 長橋美美子 : 『言葉の力で』 1982. 東京